

## 馬琴も興味を持った牛の角突きが 五月になると越後で始まる

五月の声を聞くと、新潟県中部の小千谷市東山と長岡市山古志では、本州唯一の闘牛が始まる。五月の第一日曜日から十一月まで毎月一、二回行われる。この地方では、闘牛のことを「牛の角突き」と呼んでおり、昭和五十三年には全国の闘牛で初めて国の重要無形文化財に指定されている。

一トを超える巨牛がぶつかり合い、技を駆使した戦いがくりひろげられる。越後の闘牛はほかの地域のものとは異なり、昔から勝負をつけないのが決まりで、「押し合い」「角打ち」といった技の出し合いが見どころとなる。

勢子は牛のそばに付かず、土俵の周りで取り囲み、時々掛け声をかけたり、手を打ったりして牛の戦いを見守る。

戦いは完全に「牛まかせ」で進み、五、六分で牛を引き分ける。引き分ける時は角に綱をかける方法ではなく、後ろ足に足取り綱をかけて二頭同時に引っ張って分ける。

使われる牛は、ほとんどが岩手県産の南部牛にショートホーン種を交配して作り上げた

日本短角種である。そのためか赤牛が多く、黒牛はめつたに見られない。

その起こりは古く、四百年以上も昔の天正年間（一五七三〜九二）のことと伝えられている。

滝沢馬琴は長編小説『南総里見八犬伝』第七輯のなかで、「闘牛（うしあわせ）」についてその蘊蓄を披歴している（馬琴の小説は、本筋よりもこの手の話が面白いという人もいる）。

中国での闘牛から説き起こして、友人鈴木牧之（『北越雪譜』を著した越後湯沢の縮商人）の手をわづらわせた越後の牛の角突きまで解説を加えている。

そのうえ「実は是、北国中の無比名物、宇内の一大奇観なり」と言い切り、わざわざ「この牛の角突きの事は、皆真実なり」と、カッコ付きの注まで入れている。

